お擲御猟を去りしと見へ候るおそ後しき事也とぞ

一六 天保五九月十日御ことゆゑ

長州藩組頭相勤
當時隠居
戸田平左衛門 行年七十余

嫡孫承祖
当時小善徳

戸田 何某 安年十一歳

平左衛門 妻 廿二三歳位

同人中間 廿四歳

右平左衛門妻事中間と密通ニ相ひ候ハ而ハ卯ニ一ツ橋殿御家人
同人ハ其所信任居ハ多し用人代り致居ニ何某と又ハ妻義致
密通中間と方ニ差さかりハ右或也平左衛門用所ニ参りハ
而ハ中間待居ニ為接身ニ為一刀ニ及殺害 御家人も為手負
先ハ深手為吏人右中間ニ右家ハ甲冑勤事支配戸田七周
屋敷へ欠込右ニ御身中迷ハ此時未敢ハ也早速事行不ハ中
違評定ニ未如ハ中間親先年ニ手ニ未如義有ニ付 右
迷恨とも出ニ也及此ニ候紀也

封也 帰宅

一通り等しき
相返ス

帯合
平左衛門嫡孫
戸田 [illegible] 年十五

一 右之通尋之上
入牢

平右衛門申口 源蔵 二十四

同人妾 たよ 二十二

医師 敬
徒士格侍
浩右衛門悴
三井長右衛門

疵所療治
不致

右被評議候因大隅守筒井伊賀守村瀬平四郎立合大隅守
伊賀守ゟ申渡し

一 同八日暁右仕中ゟ源蔵を申若殺祖父平右衛門寝居候処へ忍入
平右衛門并同人妾たよ手疵為負申候右相番仕候ニ付兼而
同居仕居候一橋殿徒士格三井浩右衛門悴長右衛門居合候ゟ
立廻り候得は源蔵義切掛り候ニ付取押て申候右相果候内手疵
請源蔵義近所家元戸田下総守方ヘ取押候ニ付取押殿へ右
申越候平右衛門疵所ハ面部耳ヘかけ深サ壹寸余長サ四寸位壹ヶ
所頭深サ壹寸長サ三寸壹ヶ所咽深サ七八分長サ壹寸壹ヶ所胸
ゟ六寸かすり疵壹ヶ所腕ゟ下深サ五六分壹ヶ所右ノ疵所眉
ゟ右之方深サ五六分長サ四寸壹ヶ所長サ六寸疵所髪際ゟ
頬へかけ深サ三四分長サ五寸壹ヶ所同所耳ゟ上深サ三分長
サ四寸壹ヶ所月代ゟ中深サ三分長サ四寸壹ヶ所眉ゟ深サ[illegible]
四分長サ三寸五分壹ヶ所平右衛門儀ハ右手疵ニ而相果申候

依て此段和より少年にして右を相始末新来行而以味
少年ノ格を新ニ以上

右少年蒙合行英之ハ上進仕堅和ニ被少年之夜ニ文を書ル

蒙合
戸田平左衛門孫
戸田光之助

戸田平左衛門邦政を我国役の列なりしか去年此甚病に
よりて辞して蒙ハ元に加ハりけり此比家の下郎に
此殺ぬとて何へり昔天明丙午の年溢ありし時邦政まで
成重にして馬上鞭(ムチトリ)のこ具し石切橋の迄通る比蒙通
の事と争論して者切殺し行るむくひ因果報意お
ハ行しなと人中ハ事の数有へきなしく称たむまさ

郎よし菓とて人の携へけるを呼しぬ

白和
西丸小性組と云
七百石
[illegible]

一 天保五八月十二日町觸

此節追ハ米相場ハ下落ハ付味噌醤油を始て高
巻物商人共高賣ハ米並ハ詞合ハテ買ハ門下ニ
有去ハ町年寄共ハ為ハ後ハ上ハ右食物商人不限
読ハ商人共賣買ハ米並ハ言並ハ蔵を振合似
合ハ御並ハ門下ハ頼又ハ並ハ門下ハ其ハ稲ハ芳
らせハ新米ハ至しまし其網一ハ立上諸職人書

八